

UCLA 梅尾コレクションの研究

覚城院旧蔵書の視点から

幾浦 裕之
イクワ ユキ

ただいまご紹介いただきました、早稲田大学大学院生の幾浦裕之と申します。私は今年（二〇一七年）四月から、三カ月間、訪問研究生（Visiting Graduate Researcher）としてUCLAに所属しました。柳井正氏のご寄付によって設立されたThe Tadashi Yanai Initiative for Globalizing Japanese Humanitiesの一環である、UCLA・Waseda・リサーチ・フェローシップ・プログラムで派遣していただきました。

UCLAの東アジア図書館では、日本研究司書のバイアロック知子氏に図書館の利用にあたってお世話になり、今回の古典籍調査においてもご協力いただきました。東アジア図書館では昨年、梅尾祥雲という仏教学者の旧蔵書の研究が進められており、図書館内の会議室で一度にひろげてまとめて調査させていただくことで、明らかにしたことを、本日は発表いたします。

UCLAには約一三〇〇点の古典籍が所蔵され、そのうち仏書については、梅尾コレクションという約一一〇点の古典籍がその中核を占めています。この梅尾コレクションというのは、梅尾祥雲（一八八一―一九五三）の旧蔵書で、古典籍と近代以降刊行の、三四二の書名の合計九六八冊と曼荼羅二巻からなっています。このうち一一〇点の古典籍については、書誌事項についてはほぼ悉皆調査し、近代以降の書籍についても全体を閲覧することができました。

梅尾祥雲は、密教の印契や真言を西洋文献学的方法で考証し、当時は本来公開すべきではなかった事相を公開するなど、先進性と業績で密教研究に一時代を画した人物です。高野山大学の初代図書館長として蔵書の整備に尽力しました。梅尾コレクションは祥雲の僧侶としての修学活動と、仏教学者としての研究活動、人間関係を投影したものと云えます。その全体像について書誌学と蔵書史の面から考察します。

研究途中でもありますので、近年の日本文学の研究動向に関連する要素にしぼってとりあげます。まず、近年、海外の図書館や博物館に所蔵される古典籍への関心が改めて高まり、国文学研究資料館では国際共同研究として「江戸時代初期出版と学問の総合的研究」（研究代表者ピーター・コーニツキー（ケンブリッジ大学 アジア中東研究学部 名誉教授））が進められています。

また、二点目に、日本の寺院史研究においては、各寺院が所蔵する典籍、聖教の研究の進展により、個別に進められていた調査の報告が共有されるようになりました。九月には慶應義塾大学で第一回日本宗教学文献調査学会合同研究集会（二〇一七年九月二十三、二十四日、科研費（基盤B）「新義真言系聖教の形成と教流的交流に関する基礎的研究」（研究代表者 宇都宮啓吾（大阪大谷大学） 主催による。）が開催され、本研究も、そこでのパネリストの一人、大阪大学の中山一麿氏の覚城院の調査・研究とご教示に多くを負っています。（九月の合同研究集会では、公開シンポジウム②基調講演 中山一麿（大阪大学）「覚城院所蔵の中世期写本と根来寺・真福寺」として登壇されました。）

三点目に、日本近代の学問・宗教・研究ジャンルに対する再検討が各方面でなされております（井田太郎・藤巻和宏編『近代学問の起源と編成』（勉誠出版 二〇一四年）、大谷栄一・吉永進一・近藤俊太郎編『近代仏教スタディーズ 仏教からみたもうひとつの近代』（法蔵館、二〇一六年）など）。このような状況に鑑み、仏教の近代化、

国際化の動きのなかで、梅尾祥雲がどのような役割を果たしたかを考察します。

祥雲について知る基本的な参考文献として、平河出版社から刊行された『梅尾コレクション顕密典籍文書集成』があります。こちらは梅尾コレクションのなかから六六点を影印化したものです。その別巻には、影印化された典籍の解題と、祥雲の関係者によるエッセイ、論文、梅尾コレクションの目録が収録されています。以下、これを別巻と略称します。

UCLAの古典籍については、国文学研究資料館の鈴木淳名誉教授と、九十年代にUCLA東アジア図書館で日本研究司書を務めていた三木身保子氏による『カリフォルニア大学ロサンゼルス校所蔵 日本古典籍目録』（刀水書房 二〇〇〇年）があります。こちらはUCLAの古典籍の重要性に早くから注目し、調査された大変すばらしい目録で、今回の調査研究でもこの目録をもとに作業をすすめることができました。

まず祥雲の略歴を説明します。祥雲は明治十四年（一八八一）に香川県三豊郡吉津村の宮本伝蔵の三男として誕生し、その西の仁尾村にある不動護国寺覚城院の梅尾本元の徒弟として入寺、得度し、二十七年には本元の養子として入籍しました。梅尾というと、明恵で有名な京都梅尾山、高山寺がありますが、覚城院先代住職の森諦円によれば、この本元が明治時代に仁和寺に在職中、高山寺を兼務したことから、本元がこの姓を名乗るようになったという事です。

三十四年には香川県香川郡香西町釈迦寺に住職し、以降、周辺寺院の住職を歴任します。大正十年（一九二二）には、サンスクリット語、パリー語に於ける密教聖典並びに秘密仏教像研究の為、フランス、イギリス、ドイツ、インドへ留学を命じられ、十三年に帰国し、真言宗高野山大学教授となります。終戦の年には、高野山大学学長、昭和二十一年には高野山密教研究所所長に就任します。二十二年には自ら大学長を退任し、戦後は一般向けの書籍

の執筆に努めました。以上の経歴は、祥雲の子息、祥瑞（一九二八—一九八八）の作成した年譜に主によっています。

発表要旨には、祥雲が覚城院の住職を務めたと書きましたが、祥雲が覚城院の住職となったか否かについて、検討を要する問題があります。祥瑞は、祥雲が一九〇一年以降「密蔵寺、不動護国寺、広厳寺、神宮寺等の住職となりたる事あるも、歿時は、釈迦寺及び愛媛県周桑郡楠河村神宮寺の住職たり。」と述べています。祥瑞は、祥雲が「不動護国寺覚城院の住職を務めたと書いているわけです。が、『新修仁尾町誌』を参照すると、明治維新のころ以降、覚城院の住職は仁純、信元、体仁、来仁とあり、当時の住職、森諦円に至ります。体仁が祥雲の師である梅尾本元、来仁が兄弟子の梅尾仲道の法号です。平河出版社刊行の集成の別巻に収録される「梅尾博士の若かりし頃の思い出」では、本元以降の覚城院の歴代住職を系譜で示し、祥雲を覚城院五十六世としています。『新修仁尾町誌』によると、祥雲は住職として数えられていません。現在覚城院の経蔵資料を調査している大阪大学の中山一磨氏によると、覚城院の記録でも祥雲は住職としてカウントされていないということです。このころ、何をもって住職とすると、微妙な時代であったこともあり、書類上と実態と、寺院内での位置づけが一定していなかったようです。この点については、今年七月に発表要旨を提出した際には詳細が不明で、九月に新たにわかったことです。

つづいて、祥雲の旧蔵書全体のなから、UCLAの梅尾コレクションの位置を説明します。祥雲の旧蔵書は現在三つの図書館に所蔵されています。ひとつは、子息祥瑞の没後、一九九三年に香川県立図書館に寄贈された「梅尾文庫」です。私は未調査ですが、ここにも祥雲の蔵書が含まれているようです。

そしてもうひとつがUCLAに所蔵される梅尾コレクションです。最後の一家所が高野山大学図書館です。発表資料で引用したシンポジウム（松長有慶・山崎泰廣・上山春平・堀川和海「シンポジウム「近代高野山の学匠たち——金山穆韶・梅尾祥雲を語る——」」〔『密教学研究』三三三号 二〇〇一年三月〕で語られているように、祥雲は留学

中に蒐集した洋書を持ち帰ります。それを含めた洋書が、祥雲の没後高野山大学に購入されます。今年九月に高野山大学図書館で調査させていただいたのですが、洋書の部に他の図書と混在して所蔵されておりました。梅尾祥雲旧蔵書としての単独の目録等はないということです。しかし、同図書館の設立まもなくの最も古くからある洋書です。背表紙と小口など外見を見ただけでもある程度判別可能です。彩色された小口や大型本などもあります。洋書全体に含まれる祥雲旧蔵書の悉皆調査には集中的に行って2週間ほどかかるかと予想されます。

つづいてUCLA梅尾コレクションの所蔵経緯を説明します。一九六四年にUCLAで中国仏教、日本仏教の諸講座が東洋学部に新設されることになり、仏書の充実が急務となりました。蔵書形成を主導した足利演正によると、サン・フランシスコの仏教会本部やロサンゼルス of 仏教各宗連盟の賛同を得て、寄付をうけることができたということです。

和田敦彦『書物の日米関係 リテラシー史に向けて』（新曜社 二〇〇七年）によると、足利は一九五三年に日本に研究休暇で滞在しています。六二年に祥瑞から、高野山大学が購入し得なかった祥雲の和書（写本及び刊本）を購入することになったということです。和田敦彦氏によれば、足利はこの五三年時の滞在で、「全集・叢書類をはじめとした人文系の基本図書や仏教関係の文献を二〇〇冊以上大学のために購入している。一九五五年の報告によれば、その時点で中国語、日本語図書が五万冊規模に急成長していることがわかる。」ということです。

現在のUCLA東アジア図書館が、かつてオリエンタルライブラリー、東洋図書館という名称だった時代は、図書館内の書庫にまとめて所蔵されていたこともあったようですが、現在は普段は同大学の閉架書庫SRLFに配置されています。書誌項目にTogano Collectionとある古典籍、書籍をSRLFから請求し、移動式書架四台に搭載される分量です。古典籍は紫色の帙に、明治以降の洋装本書籍はそのまま、或いは大小様々な帙や箱などに収められて

います。

UCLAが現在の梅尾コレクションとなる蔵書を祥雲の没後十年後に購入し、そこから十二年後、貴重資料の影印化が企画されます。一九八一年、『梅尾コレクション顕密典籍文書集成』として平河出版社より刊行され、国書総目録、仏書解説大辞典の両方、或いは一方に未紹介の典籍六十六点が影印化されました。一九九三年から九七年、数回に渡って国文研の鈴木淳教授が古典籍全体を調査し、梅尾コレクションの古典籍も含め、『カリフォルニア大学ロサンゼルス校所蔵 日本古典籍目録』（以下、『加大日本古典籍目録』と略称）として目録にまとめられました。

これによって梅尾コレクションは紹介されつくしたようにみえましたが、それぞれの収録の方針から、洩れた書目や、知り得ない情報もありました。まず、平河出版社の影印集成では、貴重な写本の紹介が目的であり、古典籍の約半分を占める刊本の書誌情報についてはわかりませんでした。また、近代以降の書籍についても書名しか載せていません。『加大日本古典籍目録』では書写奥書に「明治」とあるものは基本的に収録されず、個々の古典籍の表紙にある署名、蔵書印などは記録されませんでした。そのため、梅尾コレクションは紹介されながら、その全貌はいままで知り得ない状態にあつたわけです。

しかし、文庫や古典籍の研究にあたっては、第一次的な調査として、目録化によって貴重な典籍の発掘がされてもなお、歴史上の人物や組織の書物蒐集の研究という蔵書史的なアプローチが可能です。

中山一磨氏は「経蔵調査研究の問題点と展望」（『仏教文学』三六・三七号 二〇一二年）において、「悉皆調査そのものが研究目的となり、成果となる」調査方法について提言しています。「一点一点の重要典籍の発見に主眼を置いた調査から、ある共通項をもった複数の蔵書群の構成や意味づけを行う研究に力点を移してみたらどうか。」というものです。そのためには、「先ず調査項目の整備が必要」であり、「一点一点の典籍の分量は量るが、表紙右

下にある署名は調査に取らないといった事は長く行われてきた事であろう。しかし、典籍を蔵書群として捉えるならば、手沢・伝領を示すこの署名こそ重要な書誌項目ということになる。」と指摘しています。このような、調査項目の整備は、研究者の滞在、調査日数に対して、対象とする典籍の多い在外古典籍の調査においても重要であると考えられます。そこで、『加大日本古典籍目録』が省略してきた、書物の伝来、利用に関わる蔵書印、署名などに特に注目して、今年六月に二一〇点の古典籍を調査しました。

発表資料に『加大日本古典籍目録』のなかの、『大毘盧遮那成仏経疏』を目録化したページから書誌情報を引用しました。ひとつは近世初期の高野版（同版は岡雅彦ほか編『江戸時代初期出版年表「天正一九〜明暦四年」』（勉誠出版 二〇一一年）の六三ページにも見える）、もうひとつは近世中期刊行の後印本です。これは『大日経』の古くからある註釈で、真言宗の基本経典であるため、平河出版社の影印集成では当然、影印化されていません。しかし、同典籍について調査すると、多くの情報をふくんでいることがわかります。

例えば、通し番号一二六四の方は、表紙右下に「覚城院」と墨書され、後ろ見返しにも「讚州仁尾邨覚城院蔵」と墨書されています。また、もう一方の通し番号一二六六の版本の一丁オモテの右下には、朱印を重ね捺して印文を抹消した梓付朱方印があります。ある時点で所有者がうつったときに、前所蔵者の蔵書印をわからなくしてあるのです。こちらは梅尾コレクションの他の古典籍の蔵書印と比較すると、抹消されていないものもあり、どうやら「伊舎那院」とあったようです。

覚城院というのは、先ほど祥雲の略歴で紹介した、祥雲が入寺した香川県の寺院です。伊舎那院というのは、同じく三豊市内、覚城院の南東の財田町というところにある寺院です。梅尾コレクションには合計十一점에覚城院という寺院名、また山号が署名や蔵書印で示してあります。伊舎那院の蔵書印をもつものは合計九点あります。

発表資料に覚城院の旧蔵であることを示す署名、蔵書印のある典籍の一部をまとめました。

『摩訶瑜伽自在四十手深要決義』(写)：表紙に「西讚岐仁保覚城院／常住」と墨書。

『應理大乘傳通要録』(刊)：裏表紙に「西讚仁保邑覚城院／仁純理玄求之」と墨書。

『密藏要義』(写)：表紙に「仁純所秘」、裏表紙に「西讚仁保覚城院／常住」と墨書。

『秘密曼荼羅教開演玄叙 教相大義』(写)：表紙に「西讚岐仁保村覚城院仁純理玄／所有」と墨書。

『法則集』(刊)：墨方印「讚州／覚城院／仁保」(二丁オモテ右下、最終丁左下)。

『密林餘材』(写)：墨方印「讚州／覚城院／仁保」(表紙右下、一オモテ右下)。背に「南月堂」「三等」と墨書。

『秘藏寶鑰問談鈔』(写)：表紙右下に「讚岐覚城院」と墨書。

覚城院の署名のいくつかには、祥雲が弟子入りした本元の二代前の住職、仁純の名前が見えます。これらの典籍は、かつて覚城院に所蔵され、歴代の住職などによって利用されたものと考えられます。ここでは取り上げませんが、兄弟子の仲道の旧蔵であったらしい版本もあります。つまり、梅尾コレクションといっても、その伝来を示す蔵書印や署名などから、さらにいくつかのまとまりに分けることができるのです。それは、梅尾コレクションの古典籍に、覚城院への流入典籍と同様の書誌学的情報があるためです。

中山氏の二〇一六年の覚城院の調査報告(中山一磨「覚城院蔵書の整理保存と基礎的研究」(『公益財団法人福武財団助成活動アニュアルレポート 二〇一六』))によれば、伊予の実報寺の旧蔵書が確認できるとあります。

梅尾コレクションの典籍のひとつに、『理趣会十七段曼荼羅』があります。これは折本の刊本で、祥雲の主な研

究対象であった『理趣経』と、それにもとづく曼荼羅図です。この曼荼羅図には合計6か所に「実報寺宝蔵」という蔵書印が見えます。

『理趣會十七段漫荼羅』

外題「理趣會十七段漫荼羅」と題簽に墨書。(刊)折本二帖。題簽に「梅尾蔵」の蔵書票印を捺す。本来の表紙から切り取ったとみられる、外題を墨書した紙片「理趣會曼荼羅并／釋經」が付属する。表紙右上に黄緑票[S37]。下に桃票あり。上卷(理趣會曼荼羅)には合計六箇所に朱方印「豫洲乗村郡／實報寺宝蔵」を捺し、見返しに「聖帝山實報寺／宥天」と墨書。下卷(写)(外題「理趣釈經」)は、見返しに同蔵書印を捺し、「實報寺」と墨書。

また、先ほどの中山氏の報告によれば、覚城院には、覚城院塔頭の金光寺の僧、行範(ぎょうばん)所伝の典籍が相当数流入していると指摘されていますが、梅尾コレクションにも、金光寺の行範の署名、識語をもつ刊本が複数含まれています。

『貞観政要格式目 僧宣』

外題「□観政要格式目」と子持ち梓刷り題簽に墨書。(刊)袋綴一冊。表紙右上に黄緑票[K63]、剥離跡二種、「□之箱」。表紙右下に「金光寺」、裏表紙左下に「遍照院」と墨書。見返し左側に「讃州仁尾／明和三丙戌九月求之寶珠山遍照院金光寺／行範」と墨書。最終丁左下に「寶珠山遍照院金光寺行範」と墨書。

このように、梅尾コレクションは、周辺寺院からの流入典籍を含む覚城院の経蔵の実態のひな型、つまり経蔵の性質をある程度反映したものとさえそうです。

覚城院は真言宗御室派の寺院で、流派は異なりますが、善通寺の典籍とのつながりをうかがわせるものもありま

す。それが、『自宗所依書籍目録』という、明治四十三年に祥雲自らが書写したと見られる、仮綴じの表紙をもつ小さな目録です。本文は墨筆で書かれ、さらに各経典、註釈の著作者の生没年などさまざまな考証が鉛筆で書き込まれています。

こちらは平河出版社刊行の集成では書名のみを目録に掲載して、影印化されず、『加大日本古典籍目録』では未収録でした。そのため、国文学研究資料館の日本古典籍総合目録データベースにも登録されていません。しかし、同データベースで検索すると、国文研による善通寺の調査によって撮影されたマイクロフィルムと同じ目録が確認できます。善通寺の一本には、祥雲の目録にみられる鉛筆の書き込みはないため、やはりこの部分は祥雲の考証であるとみられます。

以上のように、梅尾コレクションは覚城院の旧蔵書と、周辺寺院からの流入典籍を含み、祥雲の修学、研究活動の足跡を伝えるものとなっているのです。

最後に、梅尾コレクションの近代の資料、書籍について二点紹介します。高野山大学学長としての祥雲を考える資料として、国際仏教協会からの書簡があります。こちらは六月のUCCLAでの調査で、『真言宗中学』の教科書にはさんだ状態で見つかりました。これは昭和二十一年に、連合軍最高司令部情報部の依頼で、国際仏教協会が仏教関係の図書資料の供出を求めてきたものです。当時祥雲が学長であったことから、祥雲のもとにこのような書簡が残されているのだと考えられます。国際仏教協会は、渡辺海旭（『大正新修大藏経』を監修した仏教学者）の死去を契機として一九三三年に設立された組織で、前期には西洋との学術交流を行い、後期は東南アジアの仏教徒に対する民族的な研究調査を行っていました（大澤広嗣『戦時下の日本仏教と南方地域』法藏館 二〇一五年）。アメリカ西海岸で唯一プランゲコレクション（占領期の出版物検閲資料）の複製を所蔵するUCCLAにとって、

当該資料は、戦後史研究の一次資料として価値をもつものといえます。

また、高野山には、鈴木大拙（一八七〇―一九六六）夫人のビアトリス（ビアトリス・アールスキン・レーン・鈴木、一八七八―一九三九）が滞在していたことがあるのですが、大拙やビアトリスの著書の署名入りの献呈本も残されています。こちらは仏教徒の国際交流の足跡ということが出来ます。

最後に、今後の課題を示します。まず、なぜこのように寺院所蔵の典籍が個人の蔵書に含まれるということがあったのでしょうか。この経緯の詳細を明らかにするためには、覚城院経蔵の全体における、UCLA 梅尾コレクションの古籍の位置の解明が必要と考えられます。そのことによつて、なぜ祥雲が覚城院の経蔵のなかからこれらの古籍を特に身近に置き、自らの蔵書としたのかが明らかにできると考えられます。また、高野山大学図書館、香川県立図書館に所蔵される祥雲旧蔵書の詳しい調査によつて、祥雲旧蔵書の全体像を書誌情報として復元することも可能でしょう。本研究によつて、仏教の近代化、国際化の大きな動きのなかにおける、祥雲の位置を解明することができると考えています。

* 討論要旨

ダヴァン・ディディエ氏は、梅尾コレクションのなかには他の宗派の書物も含まれているか、と質問した。発表者は天台系の資料も二、三点含まれているが、顕教に関する書物は含まれていない、と回答した。

落合博志氏は、祥雲がもともと寺院の持ち物であった書物を、個人の所有物として、別の場所に移したという事実から、どのような意味を見出すことができるか、と質問した。発表者は、現時点ではどのような経緯があったのか不明である、と回答した。落合氏はまた、近世以前において僧侶の寺院間の移動に伴つて蔵書の一部が動いたという例が別の寺院の蔵書を調査した際にも見られたことから、書物の移動に対する意識について考えることができるのではないかと述べた。落合氏の発言を受けて、司会の海野圭介氏は、寺院内部のどの組織が所蔵しているかによつて書物の扱いが変わる、という現代の僧侶の話が、この問題を考える手がかりになるのではないかと述べた。